

～旧約聖書を読んで感じること～ (85) 炎の預言者エリヤ



預言者エリヤ 聖カテリナ僧院

最初にエリヤは異郷のサレプタに逃れ、そこで薪を拾っていた寡婦に水を買い、また、その薪でパンを焼いてもらい、助けられて、イスラエルに帰りました。バアルの預言者たちとカルメル山で対決した時、エリヤの祈りが顧みられ、薪の上の燔祭に、主の火が降ったため、燔祭は焼き尽くされ、勝利しましたが、やはり、逃げざるを得ませんでした。

最後にエリヤが逃げて行ったのは、煙に包まれると表現される神の山ホレブでした。モーセがそこで、柴の中に燃え上がる炎の中から神の言葉を聞いた場所です。エリヤは炎と結び付けて想像される預言者です。

ホレブの山の洞穴に隠れた時、エリヤは「ここで何をしているのか」という主の言葉を聞きました。エリヤは「主のために情熱を傾けて仕えたのに、イスラエルの民は主の言葉を聞き入れず、自分まで命を狙われている」と怒りと恐怖をもって、訴えました。

主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき

主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」(列上 19:11-13)

激しく生きてきたエリヤには、思いがけないことでした。静かにささやく神の声を聞いたのです。静かな言葉の中に神の御心を聞きました。そして、ここで隠れて何をしているのかと再度神の促しの言葉を聞きます。エリヤは神の計画を告げられ、そのために働き、エリヤの後継者としてエリシャを選び、信仰を守るために、再びイスラエルに帰ることにしました。

アハブ王が死に、息子アハズヤが即位しましたが、怪我をし、寝たきりになり、エクロンの神バアル・ゼブブに託宣を求めました。これを知ったエリヤは「イスラエルには神がないとでも言うのか」とアハズヤの使者に伝え、「アハズヤは必ず死ぬ」と告げたので、アハズヤの使者たちは王のもとに帰り、このことを王に言いました。アハズヤはすぐに山の頂に座っているエリヤに、王のもとに来るようにと、50人隊長をその部下たちと共に、遣わしました。エリヤは彼らに答えて、「わたしが神の人であれば、天から火が降って来て、あなたと五十人の部下を焼き尽くすだろう」と言った。(列下1:12)

エリヤはこの時も天からの火をもって、2度もアハズヤの兵を裁き、殺しました。3度目に隊長は命乞いをしました。また、主の御使いが「彼と共に降りて行け。彼を恐れるには及ばない」と告げたのです。恐怖の消えないエリヤの姿をも感じ取れます。エリヤは王のところへ行って預言を伝えました。エリヤの預言の通り、アハズヤは寝台から降りることなく、死にました。

やがてエリヤは弟子としたエリシャと共にギルガルからエリコへ行く道で、事件が起こりました。彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。(列下2:11) エリヤとエリシャの間に火の馬が引く火の戦車が割って入り、エリヤは旋風、つむじ風に巻き込まれて消えました。空からエリヤの外套が落ちてきたただけでした。

不信仰と激しく戦い、常に勝利し、最後の姿も燃える情熱の場面で描いています。彼の死が記されていないため、聖霊の火と共に、再び現れる預言者として 見よ、わたしは／大なる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。(マラ3:23) と崇敬をもって語り伝えられています。使徒パウロは神の裁きがあっても、残りの者を置く例(ロマ11:4)としてエリヤを引用しています。